HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	電子書籍と学術情報流通，そして電子書籍時代の図書館
Author(s)	岡本，真
Citation	科学技術コミュニケーション，9，7-10
Issue Date	2011-06
DOI	https://doi.org/10.14943/50088
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45775
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC9_002.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

シンポジウム報告

電子書籍と学術情報流通，そして電子書籍時代の図書館

岡本　真

E-books, Distribution of Academic Information,
and the Future of Libraries in the Era of E-books

OKAMOTO Makoto

1.　はじめに

本報告では，まず「電子書籍の本質」に関する私見を述べ，次いで「電子書籍が学術情報流通にもたらす影響，その展望と課題」と「電子書籍時代の図書館のあり方」を論じる．その上で，最終的には「科学技術コミュニケーションの観点から見た電子書籍の可能性と課題」に関する討論の素材を提供したい．

2.　電子書籍の本質

「電子書籍の本質」という問いへの答えは，十人十色だろう．最近では，複数人で読書の記録を共有するソーシャルリーディングが注目を集めている．実際，筆者自身，先年刊行した共編著『ブックビジネス2.0』（岡本・仲俣編著 2010）の電子版（iPhoneアプリ版）には，Twitterを介したソーシャルリーディング機能を実装している（図1）．

図1　電子書籍のソーシャルリーディング機能

所　属：アカデミック・リソース・ガイド株式会社 代表取締役
連絡先：arg.editor@gmail.com

しかし，ソーシャルリーディングは，電子書籍が可能にするものではあるが，必ずしも電子書籍の必要条件ではない．というのは，ソーシャルリーディングはあくまで従来の読書という行為の延長線上にあるに過ぎないからだ．電子書籍が開く可能性は，従来の読書という行為を否定はしない．だが，本を読み進めることで情報・知識に接近するという連続的な行為であった従来の読書とは，まったく異なる．電子書籍の世界は，現時点で実際に電子化されているコンテンツ数という議論を脇に置き，理論的な面だけで考えれば，すべての書籍，そしてそこに含まれる「知」を横断して検索・閲覧できるようになることを意味する．この点は，先にふれた従来の読書と電子書籍による読書とを大きく隔てるだろう．

もちろん，電子書籍においては従来のようなテキストを連続的に読み進めるという読書行為は可能ではある．だが，電子書籍のより本質的な用い方は，任意のキーワードで検索し，その語が含まれるあらゆる書籍を抽出し一覧にできるところにある．このような知の横断的な検索・閲覧の前提となるのは，当然ではあるがまずはテキストのデジタル化である．そして，いつどこからでもアクセスが可能であるように，ネットワーク上に存在していること，言うなればウェブ化していることもあるべき電子書籍の前提だろう．

そして，現段階ではいまだ軽視されがちであるが，そのデジタル化され，ウェブ化された電子書籍がオープン性を持っていることが欠かせなくなる．仮に依拠するデバイスが異なるにせよ，その電子書籍に内包されるコンテンツは，常にオープン性を持っていることが望まれる．具体的には，たとえばEPUB等の標準的な電子書籍仕様で，あるいは最もベーシックなテキストファイルの形式で誰もがコンテンツを自由に取り出せることが必要だ．そして，技術的な可能性だけでなく，制度的な可能性も内包していなくてはいけない．つまり，従来の著作権の考え方にとらわれることなく，最低限，検索対象に限るとしても，著作権者の都度の許諾なく，その電子書籍のコンテンツを利用できる必要がある．具体的に言えば，たとえば，クリエイティブコモンズ・ライセンスに依拠した著作権者自らによるライセンシングに関するあらかじめの意思表示が欠かせないのである．

粒度の粗い議論ではあるが，以上が電子書籍の本質に関する私見である．ここまでを仮の前提として，「電子書籍が学術情報流通にもたらす影響，その展望と課題」という次の論点に移ろう．

3.　電子書籍が学術情報流通にもたらす影響，その展望と課題

前述のように，電子書籍の本質が「すべての書籍（知）が横断して検索・閲覧できるようになる」ことであるとするなら，そのようなあるべき電子書籍の登場は，学術情報流通の世界にどのような影響をもたらすであろうか．筆者自身の展望は極めて明快だ．今後漸次実現されていくだろうあるべき電子書籍によって，流通する学術情報の俯瞰・鳥瞰が，従来に比べて圧倒的に容易になるはずだ．

従来，専門分野による異同は小さくはないが，それでもあえてひとくくりにすれば，学術情報は主に論文と書籍，そして実際には一部特定のコミュニティー内での共有に留まりがちな報告書や資料類として流通してきた．このため当然ながら，少なくともある特定の専門分野に限っても，その分野における学術情報流通の現状をトータルに俯瞰・鳥瞰することは決して容易なことではなかった．トータルに俯瞰・鳥瞰するには，ほぼ必然的に当該分野のコミュニティーの一員となること，言うなればその分野の専門家であることが求められてきた．この事象自体は元来間違いではなく，また今後も大きく変わることはないだろう．

しかし，すべての書籍を横断しての検索・閲覧を可能とする，言わば神の目を人に与える可能性がある電子書籍の登場によって，理論的には誰もが，専門家であらずとも，なんらかの分野に関する網羅的な知へのアクセスが可能となるのである．つまりは，知の発見と抽出の可能性が誰にも等

しく与えられるようになるのである．ただし，ここで理論的な可能性と留保をつけているように，俯瞰・鳥瞰できることが，そのまま価値ある知の発見や抽出を約束するわけではないことには一応注意しておきたい．その上で，論を進めると，発見・抽出されやすくなることで，電子書籍に含まれる知は，従来の非電子の書籍に含まれる知に比べて，はるかにその存在が人から人へと語り継がれるようになるだろう．言い換えれば，電子書籍に含まれる知に関する発信と共有は，それ以前に比べてより容易になるのだ．

すでに述べたように，そこに含まれる知をすべて横断して検索・閲覧できるということが，電子書籍の本質である．この結果，電子書籍は学術情報流通の面において，学術知の俯瞰・鳥瞰を容易にし，その発見・抽出を大いに助けることになる．そして，最終的には，これまで限定的であった学術的な知に関わる発信と共有を増加させることになる．つまり，電子書籍は，従来は限定的であった学術情報流通の範囲を飛躍的に拡大することになるだろう．

4. 電子書籍時代の図書館のあり方

それでは最後の論点である「電子書籍時代の図書館のあり方」へと進もう．電子書籍時代の図書館は，電子書籍の特徴でもあるデジタル化とウェブ化の真っただ中にある．このとき，図書館のあり方はどのようなものになるだろうか．この点については，前述の共編著『ブックビジネス2.0』所収の筆者の論考で述べているので，以下ではその内容を敷衍して議論を展開していこう．

電子書籍時代の到来が図書館にもたらすのは，従来のような本棚に物理的な資料を詰め込む近代型の図書館の終焉である．デジタル化された電子書籍は，ネットワークを介していつどこからでもアクセスできるという意味でウェブ化されている．そして，知へのアクセスという点での優位性を，すでに述べてきた通り，十分に有している．となると，最終的には，もはや大部分の図書館では紙の資料はほぼ不要となり，電子書籍への置き換えが早晩進んでいく．実際，日本の場合，大規模デジタル化事業という名で国立国会図書館の蔵書のデジタル化が進められている．この事業では，すでに1968年までに刊行された日本語の書籍のうち，国立国会図書館が所蔵するものをすべてデジタル化している．この段階では，まだデジタル化されただけだが，国立国会図書館や出版業界，関係省庁等の間で，合意形成が図られつつあり，そう遠くない時期に少なくとも図書館へのデジタル化した書籍の配信が認められるだろう．となると，いま述べたように，大部分の図書館では，電子書籍ではなく，従来の書籍をあえて持ち続ける理由がなくなるのだ．

事態がここに至ると，図書館は徐々にその役割を次に挙げる3つの類型に分化せざるを得なくなる．まず一つが国立国会図書館を想定する「オペレーティングシステムとしての図書館」である．二つ目は旧帝国大学系列の大学図書館，有力私立大学の大学図書館，都道府県立図書館を想定する「ミドルウェアとしての図書館」である．三つ目は上記以外の大学図書館，市区町村立の公共図書館を想定する「アプリケーションとしての図書館」である．これは図書館という機能における役割の分化と言っていいだろう．オペレーティングシステム，ミドルウェア，アプリケーションというのは，コンピュータ用語による比喩であり，要するにシステム全体を司るのがオペレーティングシステムであり，個々の作業に用いられる機能や状況に特化したのがアプリケーションであり，この二者をつなぐはたらきをするのがミドルウェアである．図書館の場合も，電子書籍時代においては，国立国会図書館のように大規模なデジタル化を推進するといった全体のインフラを構築・維持することが目的の図書館や，エンドユーザー向けに特化した機能等を提供していく公共図書館等，両者をつなぐ形でバックアップを中心とする図書館へと，そのあり方をすみ分けていくことになるだろう．

5. さいごに

以上，冒頭に述べた「電子書籍の本質」に基づき,「電子書籍が学術情報流通にもたらす影響，その展望と課題」と「電子書籍時代の図書館のあり方」を考察してきたが，それでは,「科学技術コミュニケーションの観点から見た電子書籍の可能性と課題」という今回の最大のテーマはどのように考えるべきであろうか．この点を全員で議論したい．本報告が，そのための材料の一部となれば幸いである．

●文献：

岡本真・仲俣暁生編著 2010:『ブックビジネス2.0：ウェブ時代の新しい本の生態系』実業之日本社.